

日本保健物理学会「教員等協議会・若手研・学友会」代表者会議（第9回）

① 日時：令和3年2月9日 9:00-10:00 ②令和3年2月12日 9:00-10:00

参加者：

（教員等協議会）飯本（理事）①②、安岡（理事）②

（若手研）迫田（理事）①②、片岡①、廣内①、中畠①、廣田（参与）②、嶋田②、辻②

（学友会）仲宗根①、小池①、福田①

概要①

●保物学会企画シンポジウム開催報告

・概要の確認

1. 趣旨説明（迫田）
2. 若手研の設立経緯とその活動を通して得たこと（高橋）
3. 学友会の設立経緯とその活動を通して得たこと（森下）
4. 学友会と若手研の最近の実績（福田、片岡）
5. 学友会の課題と今後の展望（仲宗根）
6. 若手研の課題と今後の展望（廣内）
7. 総合討論＋質問への回答

●企画シンポジウムに参加して思ったこと

- ・若手研と学友会が連携できていることや若手研と学友会に入った際の利点を伝えた。若手研や学友会への活動への参加を募ることがシンポジウム開催の主目的だと思っていたが、参加者に学生が少ないように思えたので目的が少しぼやけてしまった。
- ・これまでの活動を振り返ることができた。各会の歴史を確認することができた一方で、内輪で懐かしむような会になったとも感じた。この企画によって会員数が増えるかどうかは少し疑問だった。
- ・嶋田、廣田両氏による別の学会での合同企画の話題提供が多かった印象。他の学会との連携等は良い経験になる。現時点では他の学会との関わりが少ないのが現状だと思う。
→今後の繋がりが期待できるならば可能な限りの連携継続を。
- ・理事会と若手研・学友会で意見を交わす機会があると思っていたが、双方言いたいことを述べるだけ（話す内容が別々）でかみ合った議論はあまりなかった。いい意味でお互いが考えていることを知ることができたが各内容についてもっと議論を深めたかった。
→理事会としては若手側から提案があれば受け止め、支援するというスタンス。予算は積極的に用意できるので、学友会と協力して活動してほしい。古い時代は業務命令的に学友会・若手研の活動への参加を促したこともあったと思うが現在はなかなかそのような形態はないだろう。よって会員が自分から動くには、何かの個人のメリットが

感じられるようなイベント、活動を模索することになるだろう。

- ・意見交換した際の気づき：やらされて活動するのではなく、自分たちが自ら自発的に活動できる環境が理想、しかし、各仕事が重くなり本業がおろそかになってしまっているのではないので、そのバランスが保てるとよい。
- ・総合討論時の質問（コメント）

質問：福島事情について若手研がより詳しく触れるべき

→各会員の興味があるものを積極的に取り上げて勉強会として取り上げるのはよいことだが、そうでないものを積極的に扱うことは難しい。若手側からは「現在の状況ではそこまで余裕がない」という回答をした。

●若手研と学友会の今後の活動について

- ・主査等のサイクル（若手研；2—3年、学友会；1年）
- ・内部被ばくの勉強会や SNS の運営は？
 - SNS に関して、すでに投稿されているか把握していないが、文章については廣内氏や辻氏が確認済み。運営自体の担当は廣田氏。情報セキュリティの関係で内容の共有が難しく、チェック体制が確保しづらいのが現状。
 - SNS 投稿が義務だとは考えないほうがよい。一度始めたらやめたらいけないものと捉えずにまずはやってみることが重要。
- ・若手研が望むようなこととシニア世代の要望が一致すればよい。
- ・昔の保物紙に掲載された成果で、完全に一致するわけではないが、今も似た研究内容が扱われることがある。今後の若手研の企画として、先輩世代の成果を積極的に引き出すような会があるかもしれない。
- ・シニア世代が若手研に求めるものを知る機会が設けられるとよい。
- ・以前の勉強会で参加者を若手研に限定しなかったため、広い世代で意見交換がなされたことは良かった。話題を絞って勉強会を行うと各参加者もそれに関する意見を用意してくるので今後も話題を絞ったうえでオープンにしてもよいかもしれない。
- ・若手が主催する勉強会にシニア世代に講師をお願いするのも良いだろう。
 - 参加者増加が見込めるかもしれない。

●加入者を増やすために

- ・大学や団体が絞られているので、新規の開拓を理事会に協力してほしい。
- ・医療技術系、看護系は保物学会に加入してくれるかもしれない。→ 教員等協議会の寺東幹事に関連大学の状況調査を依頼している。
- ・放射線と全く関係のなさそうな学会への参加支援を提案するか。（他分野と放射線防護の関係を見つけ、その学会で論じることができれば、他学会からの加入が見込めるかもしれない。）

概要②

●シンポジウムに参加して思ったこと+派生した議論

- ・シンポジウムでは人手が足りないということは伝えられたが、人手が足りない中でなぜ定期的な活動を続けたいと思っているかを伝えればよかった。(基本的には活動したい人ができる土壌があれば良く、無理やり何かをやる必要はないが、そのような土壌を作るには定期的な活動が外に見えていることが必要だと思う)
- ・継続できるかどうか、という点は考えずにやりたいことをやって良い。
- ・活動の周辺部にいるメンバーに動き出す敷居の高さを感じさせている可能性はないか
 - 今期になって若手を担当する理事の体制が強化されたので従前に比べれば若手側は動きやすくなったであろう。(若手育成担当理事(副会長)の新たな設置。また、従前からあった若手研担当理事の権限を強化し、企画委員会直下組織の色を薄めた。)
- ・体制が変わって動きやすくなったことを若手研メンバーに認識されていない?
 - 年次大会などで保物学会の仕組みを簡単に紹介するタイムスロットがあってもよいかも。本来は総会がその役割だが参加者が少ない。周知の方法を複数にするなどの工夫が必要。
 - 甲斐会長のプレゼン資料(学会による若手支援内容リスト)をHPに掲載、は重要
- ・活動に関するアイデア
 - ・SNSをどう開始し、運営するか迷っている。皆が必要だと感じる頻度でやる必要があるので、その辺のすり合わせがまだできてないかもしれない
 - ・ICRP勉強会のスライドと議事録をベースに報告書を作ってはどうか。そのための編集費や紙媒体にする合理的な理由があるならその費用は予算から出せる。(公官庁等の目に留まるような仕かけも想定して。)
- ・シンポジウムはネット開催で活動や意見の紹介に重点がおかれていた。
 - 甲斐会長からコメントがあったことは良かった。シンポジウム参加者はいわゆるいつものメンバーだった。Zoomを利用して世界とつながるなどの活動はよくわかった。人手不足で大変ということが認知され、却って人が集まらなくなるかもしてない危惧も。

●今後の活動の展望

- ・学友会と若手研が別れているのは問題かもしれない。
- ・医学薬学系との連携
 - ・医学薬学系の学生は参加スパンが一年ない場合も多い。最初に見る学会としての役割を果たしてもらえると学生を参加させやすい。卒業研究の発表の場を渴望している(場合によっては学生には一回しかない)。

- ・RIの薬剤利用などで今後ホットになる話題。そのような方向に広げて行くのは必要。
- ・教員協議会経由での「6月発表の場は必要か」のアンケートの集計は？
 - ・回答者14名（学部生1, 教員6, 大学院生2, その他5）
 - ・2021年6月ごろに研究発表の機会など業績につながるものがあれば良いと思いますか？ 思う9, 思わない3, 未回答2
 - ・2021年6月に研究発表の機会があれば発表したいですか？ 発表したい1, 発表の機会があるなら目標にしたい7, 発表したくない4, 未回答2

●次回日程

3－4月開催で調整。

→ 次回もしくは時次回、医学薬学系理事や教員の人にもこの会に参加していただき、連携の方向性を探ることも視野に

以上